とどけ夢 未来へ
-DREAMING-

池澤 望愛（のあ）さん

●吾妻小学校６年

幼稚園の先生を目指して

私は、将来、保育園か幼稚園の先生になりたいと思っています。理由は、小さい子が好きで、面倒をみるのも好きだからです。

私の学校にも１年生が入学してきました。その子たちが学校に慣れるように支えてあげようとがんばっています。６年生となり、最上級生としての毎日の中で、小さい子が安心して学校に来られたらいいなと思っています。

将来の夢をあきらめずにがんばり、先生となったときに今の経験を生かしたいです。

みんなの広場

佐野ブランドキャラクター
さのまる

市長からのメッセージ

先月、梅雨入りしてから空梅雨が続いています。この後、農作物への影響がなければよいと願っています。

さて、さわやかな快晴のもと、先月４日に佐野市消防操法大会が開催されました。今年から参加希望枠が設けられ、参加チームが増えた中、各分団の精鋭たちが全力で日頃の練習の成果を披露しました。団員の皆さんは、各自が生業を持ちながら訓練に励み、火災や災害などの際には危険を顧みず地域社会を守ってくれており、団員のご家族を含めて、その頑張りにあらためて感謝します。

現在、本市のまちづくりにおける最上位の計画である第２次佐野市総合計画の基本構想について地区懇談会を開催し、皆さんからのご意見を聞いています。すでに佐野地区、田沼地区が終了し、この後４日に城北地区公民館で２回目の佐野地区、19日には葛生あくとプラザで葛生地区の懇談会を開催します。皆さんからのご意見をぜひお聞かせください。

11月に本市で開催する「第24回全国山城サミットin佐野」が、国の「ビヨンド２０２０プログラム」に認証されました。これは、２０２０年の東京五輪・パラリンピックを見据え、日本文化の魅力を海外に発信し、障がい者に優しく国際化につながるレガシー（遺産）を創り出す文化プログラムとして国からお墨付きをもらったということであり、今後ますます唐沢山城跡のＰＲに拍車がかかることを期待します。

その唐沢山城を築いたと言われる藤原秀郷一族が、当時、力を見せつけるために始めた浅間山のお焚きあげが22日に行われます。唐沢山を背景に夏の夜空を焦がす火祭りに、足を運んでみてはいかがですか。

まだまだ梅雨も続きます。体調管理に十分気を付けて充実した毎日を送りましょう。

岡部正英

今回の表紙　今回の表紙　「観音山公園のアジサイ」（富岡町）　平成２９年６月８日撮影

６月から７月の梅雨の時期に咲くアジサイ。富岡町にある観音山公園でも、青やピンクなど、色とりどりの花を咲かせていました。じめじめした季節ですが、梅雨ならではの鮮やかな景色を楽しんでみませんか。

キラリ★話題の「ひと」

早乙女 務 さん
（植野町）

〇プロフィール
「司馬遼太郎 佐野菜の花忌」実行委員長として活躍。
春陽会版画部会員。
元佐野市文化財保護審議委員。

佐野と司馬遼太郎のパイプ役

軍人として佐野で終戦を迎えた司馬遼太郎さんは、野に咲く花、とりわけ菜の花を好んだことから、司馬さんの命日は「菜の花忌」と呼ばれ、東京、大阪、長崎、会津若松などで開催されています。昨年、司馬さん没後20年を偲び、佐野で第1回「佐野菜の花忌」が開催されました。

今年の2月11日には、第2回目となる「佐野菜の花忌」が開催され、司馬さんから子どもたちへ贈ったメッセージ『二十一世紀に生きる君たちへ』が、植野小6年生たちにより朗読され、晴天の空に響き渡りました。

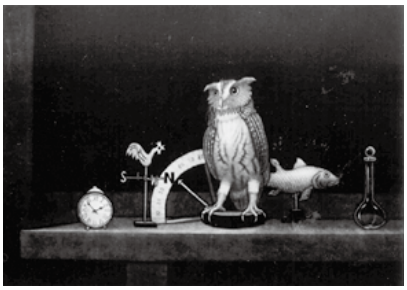
早乙女さんは、東大阪市の司馬遼太郎財団と連絡を取り合いながら、平成21年、植野地区公民館の敷地に司馬遼太郎文学碑を建て、昨年からの「佐野菜の花忌」開催などに尽力されています。司馬さんと佐野の繋がりを大切に伝えていこうと『あの夏の日の司馬遼太郎』と題した本も執筆され、司馬研究がご自身の使命であるかのようだと話されます。

「若い頃から版画が好きなのですが、今は司馬さんの研究で手いっぱいで、版画制作の時間がなかなかとれないんです」と笑顔でおっしゃる早乙女さんに、趣味だという版画についてもお話を伺いました。

30代の頃、銅版画作家・長谷川潔さんの作品に感銘を受け、メゾチント（銅版画の技法）に夢中になり、50歳の時には春陽展（大正12年設立の公募展）に初出品・初入選し、以来、毎年出品し続け、今年で34回目になりました。小中学校教師であったことから、ほとんどの題材は学校内にある置物やランドセルなどです。

司馬さんについてや版画など、自身が関わったことに一生懸命になる早乙女さんの、郷土を想うお人柄が伺えます。

（市民記者　永倉文子）



「上野の森美術館賞」受賞作品
「音のない部屋（理科室）」

佐野弁 ばんざい

「恥ずかしい」を、方言ではナリガワリーという

やせ衰えた姿や無様なかっこうを、人に見られたり、話されたりすると、きまりが悪く穴があったら入りたい気持ちになることがあります。このような気持ちを表す共通語には、恥ずかしい、みっともないなどがあります。方言にも、多少意味のちがいはありますが、ナリガワリー・ヒトギキガワリー・ゲーブンガワリーなどがあります。

「髪の毛はぼさぼさ、しかも髭もじゃでさあ。そんなだらしネーかっこうでほっつき歩かれチャー、奥さんに、『ナリガワリーから、そとへは出ネでくれ』っていわれたって、シャーナカンベー（仕方がないでしょう）」

ナリガワリーは、恥ずかしいという意味ですが、「形が悪い」と書くように、本来、髪型や服装など身だしなみの悪いことをいいました。

身内のもめごとなどを、他人にいいふらすことは、聞いて感じのいいものではないし、恥ずかしいことです。この「恥ずかしい」に当てはまる方言に「ヒトギキガワリー」があります。これは「人聞きが悪い」ということ、つまり他人が聞いて感じがよくない、というのがもともとの意味でした。

「おれは運が悪かった、こんな破目になるはずじゃなかった、などと繰り返しヨメゴト（ぐち）いうのは、ちょっとヒトギキガワリーよ」

ヒトギキガワリーと意味的によく似た方言に、「ゲーブンガワリー」があります。「外聞が悪い」の変化形です。でも、今ではほとんど使われていません。

（市民記者　森下喜一）